

辞世

～その刻、
先人たちは何を思ったのか～

ありわらの なりひら
第4首目 在原 業平



つひにゆく 道とはかねて 聞きしかど
昨日今日とは 思はざりしを

(誰もが最後に行く道だとは以前から聞いていたが、それが昨日今日とさし迫ったものだとは思わなかったなあ)

——昔、男ありけり

その昔、男性が「色を好む」というのは、肯定的に受け止められていた。加えて歌を詠むのが上手ければ、女性たちに大層もてた。今回紹介するのは、日本史上屈指のプレイボーイの辞世である。

天長2年(825)に阿保親王の五男として生まれた業平は、幼少時に父親の計らいで在原姓をいただき他の兄弟たちと共に臣籍降下した。若い頃は出世に恵まれなかったが、貞観4年(862)に従五位上に昇進した後は、いくつかの官職を歴任し、晩年には天皇の首席秘書官である蔵人頭に抜擢された。その事跡に、「姿形が上品で美しく、自由奔放に振る舞って社会規範の枠のなかにとらわれない、あまり漢詩文の学才は無いが、和歌は得意であった」と評されているように、後世に美男の代名詞と謳われるほどの容貌と、歌仙に選ばれるほどの歌才によって、多くの女性たちと恋愛遍歴を重ねた「色好み」として知られている。彼の人生や歌から着想を得て創られた『伊勢物語』(以下『勢語』)は、我が国を代表する古典として『源氏物語』など数多くの文学作品に影響を与え、また業平その人を伝説化する大きな要因にもなった。

——匂ひ残れるがごとし

今回の辞世は、『古今和歌集』と『勢語』の両方に記されているため、古来より多くの人がこの1首を読んで「死」について様々な思いをはせたことだろう。とくに『勢語』では、「昔男」の末期がいかなるものだったかを暗示させる1首として、最終段に配されている。

『勢語』によって風流な貴公子のイメージが定着してしまった業平だが、前半生は元皇族でありなが

ら不相応な卑官に任ぜられ、10年以上も昇進が滞るという不遇も経験している。これは彼の奔放な行状に因るところが大きいのかかもしれないが、ちょうどこの頃は藤原摂関政治の勃興期にあたり、皇族や他の氏族の勢力が一段と後退した時代でもあった。そのため彼が色好みを気取ったのは、時流に対する逃避や反発の気持ちがあったからではないか、という風説は古くからあったようである。

『古今和歌集』では、「その心余りて、詞たらず。しぼめる花の色なくて匂ひ残れるがごとし(情熱がありすぎて表現が不十分である。しぼんだ花の色艶が失せて、まだ芳香が残っているといった感じである)」とやや批判的な評価をしながらも、業平の歌を30首も取り上げている。その事実が表しているように、彼の歌からあふれ出す感情の奔流は、時を超えて多くの人の心を揺さぶってきた。

今回の辞世もまた、全体が己の死を嘆く暗い印象に支配されているなか、「ああ、ついに来るべき時が来てしまったのだ!」という率直な心の叫びが読み手をハッとさせる。何となく私たち現代人は、昔の人は自分たちより「死」に対する覚悟をしっかりと決めていたというイメージを抱きがちだが、彼の叫びは「死」に対する本能的な恐怖や戸惑いが、人間の普遍的なものの思いであることを教えてくれる。

しかし、業平がただの色好みではないなど感じさせられるのは、己の死を「今日明日」ではなく「昨日今日」のものと歌ったところにある。心の底では、もう自分に「明日」はないと受け入れているのだ。「嫌だけれど、仕方がないな」と言わんばかりの、このしぶしぶ密かに覚悟を決める感じ。常人とは一線を画する死生観を詠み込んだ武士の辞世よりも、現代人の感覚にはしっくりくるのではないだろうか。

(執筆/ライター 青山 繁樹)